シリーズ

# 元気です 52

# 子どもたちに夢を与え続けたい

左 中原 亮子さん Ryoko Nakahara　右 上山 洋子さん Yoko Ueyama

## 紙芝居の会「どんぐり」

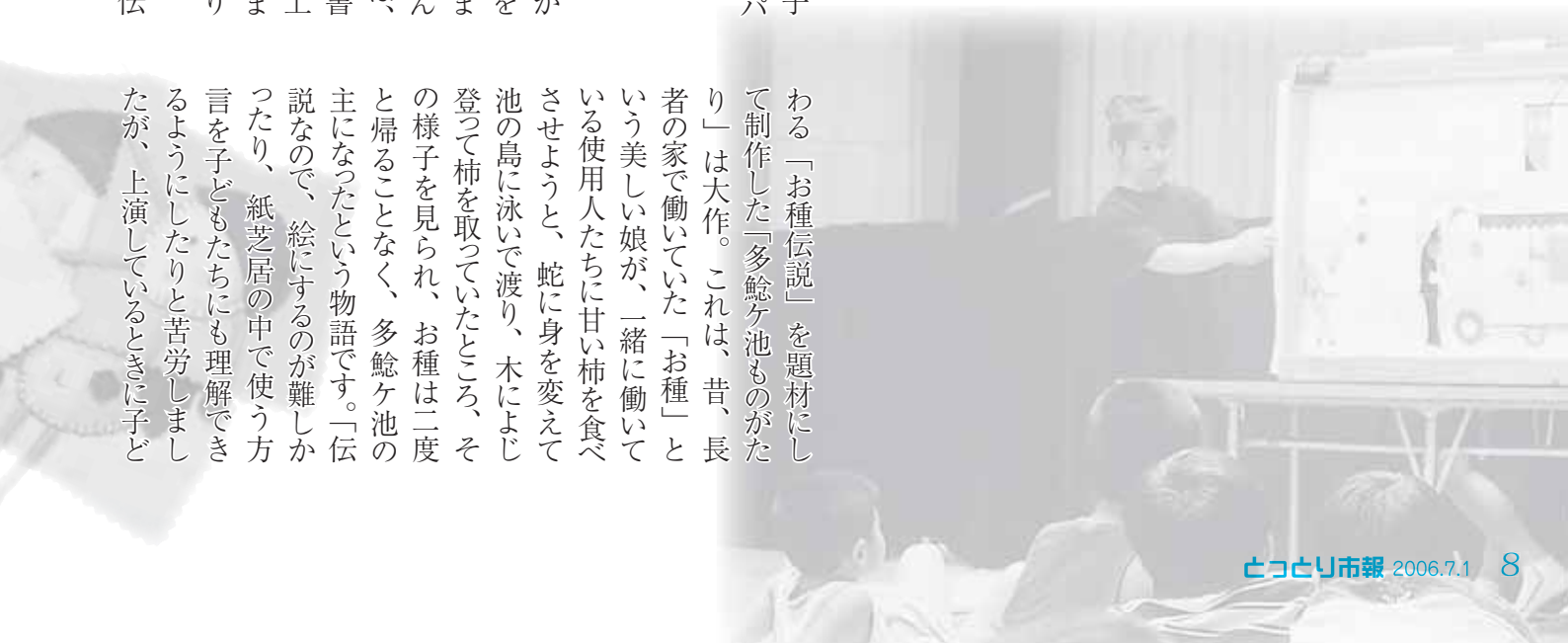
### 子育て一段落のお母さんが集まって

「子どもたちの喜ぶ顔が見たくて活動しているうちに、20年が過ぎちゃいました…」。福部町中央公民館を拠点にして、手づくりの大型紙芝居などを子どもたちに上演している紙芝居の会「どんぐり」の代表・中原亮子さんは、目を細めます。

「どんぐり」は昭和61年7月、子どもの好きな人たちが集まってスタート。グループ名は「どんぐりのせいくらべ」から由来しているもので、みんな同じだからみんなでがんばろうということでつけたとのこと。現在のメンバーは子育てが一段落したお母さんと、小学4年生の男の子の8人。「どんぐり」の紙芝居を見て育った子どもたちの親が中心となって活動しています。メンバーの職業はさまざまですが、毎週土曜日の夜には、紙芝居やペープサートなどの製作やその練習に中央公民館に集まります。

活動の柱は、中央公民館が主催で行っている春の「1年生をむかえる会」、夏休みに各公民館を巡回する「読書会」、そして「クリスマス会」。この3つのイベントに、彼女たちの子どもたちを愛する気持ちとパワーが注がれるのです。

### 大型紙芝居はお芝居そのもの

大型紙芝居のサイズは縦が90センチ、横が120センチ。それを木の枠にはめてスライドさせます。この木の枠も、もちろん手づくり。紙芝居の製作は、物語を絵にしながら台本を書くという作業で、一作品を仕上げるのに2、3カ月はかかります。今までに約30作品を作り上げています。

なかでも、昔から地元に伝わる「お種伝説」を題材にして制作した「多鯰ケ池ものがたり」は大作。これは、昔、長者の家で働いていた「お種」という美しい娘が、一緒に働いている使用人たちに甘い柿を食べさせようと、蛇に身を変えて池の島に泳いで渡り、木によじ登って柿を取っていたところ、その様子を見られ、お種は二度と帰ることなく、多鯰ケ池の主になったという物語です。「伝説なので、絵にするのが難しかったり、紙芝居の中で使う方言を子どもたちにも理解できるようにしたりと苦労しましたが、上演しているときに子ど